



雲晴

新年号

「雲 晴」第五十七号

令和八年一月一日発行

貞 林 院 瑞 正 寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
電話 (〇三三) 三六二七―三四一五
FAX (〇三三) 五六九九―五九一五

新しい年のお慶びと
新しい年

新たな年を迎えることが出来るのは、
慶ばしく、幸せなことです。また、新
たなはじまりには、抱負、目標を持つ
ことも大切です。皆さんは、もう決ま
っているでしょうか。

さて、世界をみると、戦雲立ちこみ、
日本におけるわたし達の日常も、物価
高、凶悪事件、将来に対し不安感もあ
ります。

「不安な時」において、釈尊の教え、
「自灯明」、また禅語「灯火」とあり
ます、外部の頼りだけでなく、自分自
身の足元、つまり内面や現在の状況に
目を向けることの大切さを示唆してま
す。加えて「看脚下^{かんきゃつか}」、つまり足元を

しっかり見なさい、自分の置かれてい
る状況や立ち位置を自覚し、目の前の
ことに集中することです。 毎年この
とですが、目標を持って、自分の現状
をしっかりと把握し、地に足をつけて
行動する、これが大事だと思います。

この他、新年には、仏様にお願いし、
七福神におすがりします。

ご先祖に感謝し、「南無阿弥陀仏」、
七福神様に「南無く大黒天、恵比寿、
福祿寿、毘沙門天、布袋、寿老人、弁
財天く様」

皆様にとって良き年となりますこと、
祈念申し上げます。



② 文学者／科学者・森鷗外の視線

森鷗外は夏目漱石と並ぶ明治の作家ですが、軍医としてドイツに四年間留学し最先端の科学を学んでもいます。今回ご紹介したいのはそんな鷗外による



短編「金毘羅」(明治四二)です。「金毘羅」の主人公である博士は琴平に講演に行くも、金毘羅に詣でず帰京します。すると急病に襲われ息子が亡くなり、娘も医者から一度は諦められてしまっています。しかし妻が布団に金毘羅さんの赤いキレをかけてやるなどした甲斐あってか、娘は奇跡的に回復。博士は安堵しつつ、それでもやはり金毘羅さんの赤いキレを信じないと言い切ります。しかし一方で、こうも続けます。それと同

じく、医者の言う科学を絶対的に信じるかという、そうでもない。



鷗外が生きた時代、日本は西洋から必死に学び最先端の知として科学を受容し、非・科学的な領域は前近代的と批判された。科学者の鷗外にとって、人々の信仰はどこか古いものとして映ります。しかし同時に、文学者の彼が人何かを信じようとする切実さを知り、かつ尊重していました。何も信じないとしながら冷たさのない「金毘羅」の語りは、科学や信仰、文学を越えて、何かを信じ求める人々の営みを見守り、自らの立脚地を模索する鷗外の姿勢を見て取れるのではないでしょう。

(富永真樹)

華

花ひらいて
實をむすぶ

好胤

⑫年の初めに

高田 都耶子

本棚の整理をしました。父が買ってくれた分厚くて重たい日本国語大辞典全十巻を書架から机上に引っ越して、手に取り易くしました。その一冊のページを捲っていたら「としま」の項がありました。『年玉・歳賀。年の賜物の意。新年を祝つてする贈り物で、江戸時代の町家では、貝杓子や鼠半紙(鼠色の粗末な半紙)、

塗り箸、粗製の扇など粗末な物を用いた」とありました。「年魂」だったと読んだことがあります。新年に向けて家を清めて歳神様をお迎えし、歳神様から一家は新しい魂を頂戴する。そこで年魂を表す玉餅を皆でいただく。こうして新年には魂が一つ増える。

そう言えば父は専ら「数え年」を

推奨していました。この世に誕生した時が一歳、そしてお正月にみんなで仲良く歳を取ればええんや、歳重ねるからお年玉ということやからと言っていました。住所氏名年齢を書き込むことがあると、「満・才」の満を消して「数へ」と書いて年齢を記入する徹底ぶりでした。そんな事が懐かしく思い出されます。

一口法話



「三日坊主」

新年を迎え今年の抱負に「今年こそ日記を」と目標をたてられた方もあろうかと思えます。しかし、誰しも経験があるかと思いますが、「日記をつけても三日坊主」と言われるように、なかなか続かない。故事ことわざ辞典によれば三日坊主とは「非常にあきつぱく長続きしないこと」とのたとえ、又そのような人」とあります。目標をたてる時は「今年こそは」と希望に燃えていても、何故かその熱はそんなに長く続かない。「面倒くさいこと」「好きではないこと」には人間の意志はそんなに強くないからなのでしょう。長続きする秘訣は「三日坊主」で落ち込んで、自分を責めないこと。日記をつけて(一日・三日)四日目からやめると正に「三日坊主」ですが、四日は休憩と捉えて五日目からまた書き始めれば良いのです。七日まで書き

誘いの書

「午（馬）」

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

故林 錦洞書



母との会話で思い出すのは、五反田から品川方面への車での移動中のことです。居木橋近く（ゆきはし）に差し掛かると、幼かった頃に床屋さんに髪を切りに来たことを話し始めるのでした。「お母ちゃまからお金もらって行くの。お釣りは、母から言われてますから置いてくるのよと言われてたの」と語っていた、あのお店はもう無いかなあという母に、そうねえ、どうかしらねえ、今度探しに来てみようかと優しく言っておけば良かった。

もう一つ。母は八十八歳の頃まで毎月、お香の先生として奈良から東京に通っていました。いつの頃からか辻堂の稽古場まで車で送ることになり、保土ヶ谷から国道1号線を進んでいくと途中「三処理場の背の高い煙突が見えてくるのです。そこで母が「この煙突ね新幹線から見えるのよ」と言っただけ、どの辺りか



に見えるのと聞いてあげれば良かった。今、母の代理で辻堂に向かう時、煙突が見えるとその言葉を思い出ししています。新幹線で関西に行く時にも、そろそろ見えるのだろうかとその煙突を探しています。

あの時に優しく対応しておかかったから、きっと私は一生新幹線の手窓から煙突を探し、居木橋近くを通るたびに、「もう無いわよ」と言った床屋さんを探すごとでしょう。まだ元気でいてくれる母には、出来るだけのことをしてあげたい、いえ、させてもらわねばと、年の初めに思うのです。

今年（今年）は午年です。中国の古代文

字の金文で書かれたこの馬はまるで元気にいなないているような姿に見えます。

お釈迦さまが説かれた「四馬の比喻」と言う言葉があります。

無常（自分の死）に気づく大切さについて四通りの馬をたとえにこのように教えています。

鞭の影を見ただけで驚く馬、鞭が毛に触れただけで驚く馬、鞭が肉に当たって驚く馬、鞭が肉を削って骨まで当たって驚く馬がいる

とします。

最初の馬は花が散るのをまたは火葬場の煙を見ただけで無常に気づく人として、二番目は葬儀や葬式の行列を見て無常に気づく人として、三番目は親戚や友人の死を知り無常に気づく人として、最後の馬は自分の大切な家族の死を経験して、初めて自分もいつかは

このように死んでいくのかと、このように死んでいくのかと、この世の無常に気づく人としてそれぞれたとえられています。ただしお釈迦さまはこの四通り

て八日に休憩し九日から書いてみるのも良いと思います。「三日坊主」を自覚した上で書き忘れた日は休憩と受け止めて続けてみると、意外と楽しく書き続けることができるものです。

何事も具体的な目標をたてその目標に向かって実践あるのみです。元祖さまは「日課念仏」を推奨されています。「数を定めぬは懈怠の因縁なれば数遍を勧むるに候」と数をきめた「南無阿弥陀仏」をお勧めにしています。「三日坊主」にならないように思い出した時にはいつでもどこでも「南無阿弥陀仏」を称えてみましょう。

（知恩院布教師会ホームページより）
の馬や人に優劣を付けているわけではありません。大事なことはこの世に生まれてきたすべての人が背負う生老病死という四苦から逃れるために、一刻も早く諸行無常の理（ことわり）に気づきなさいと説かれています。早く気づく人、遅い人それぞれでいいと思います。それよりも先ずお念仏をお唱えすること、いずれは必ず阿弥陀さまにお救い頂けるという信心こそが、無常に對する不安を払拭して頂けるものであることに気づきましょう。



謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

午年の守り本尊は、勢至菩薩です。阿弥陀如来の右脇侍で左脇侍は観音菩薩がおり弥陀三尊となります。

勢至菩薩は智慧の菩薩であり、智慧の光明により一切の物事を明らかに照らし出し、全ての人々の苦難や迷いを解き放し下さるお力があります。この功德により私たちを安樂の世界に導いて頂きます。

勢至菩薩のご加護により、今年一年皆さまがその功德により平穩無事に過ごされることを心より祈念申し上げます。

令和八年丙午 元旦

貞林院瑞正寺

住職 林 清方
副住職 林 良政
法類総代 林 英道

令和八年

年中行事のお知らせ

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。

*春・秋彼岸会法要につきましては、寺報にてご案内をしております。お中日に塔婆回向をしておりますので、塔

婆をご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

*春彼岸会法要 三月 二十日(金)

施餓鬼会法要 五月 十四日(木)

七月お盆法要 七月 十二日(日)

八月お盆法要 八月 十三日(木)

*秋彼岸会法要 九月二十三日(水)

当山第二十五世専運社行譽上人 十七回忌を厳修

昨年九月二十八日に先代林錦洞の十七回忌法要を当山本堂にて行いました。今回は家族と親戚のみの法要といたしました。先代の命日は十月十五日で世寿八十七歳でした。

先代は書家でしたので多くのお弟子さんがおりますが、一番長いお弟子さんは、住職と副住職の書道の師でもあります三上錦水先生で九十歳を超えておられます。

昨年三月の銀座社中展に出品された作品は先代十七回忌の供養として戒名の中の二字を書いておられます。「専運」は浄土宗僧侶の戒名である蓮社号の内の二文字です。法要の当日から一か月間は客殿舞台に掛けてさせて頂きました。

このお軸は寺宝として大切にさせて頂きます



「軸装での大作です」

浄土宗芸術祭美術展に初出品

浄土宗には宗内の各方面(絵画、書道、彫刻、音楽等)で活動をしている芸術家による会があります。浄土宗芸術家協会と言うもので、先代が理事長を務めていたこともありま。昨年住職も書道部門でお仲間に入れて頂きました。昨年十二月に開催された京都での美術展は第五十回を迎えたものであり、これに初出品したものです。

作品は仏さまを讃える禮讃の中で日中禮讃無常偈の一部を書かせて頂きました。

「人生不精進 喻若樹無根 採華置日中 能得幾時鮮 人命亦如是」

人生精進しないと根の無い樹木のようなもの摘まれた花も日光に照らされればいつまでその美しさを保てますか 人の命も正に同じです

古希を過ぎた残りの人生をこのような心構えで精進したいものです。



「京都市美術館にて」